会員のたより・意見

琵琶湖のコハクチョウ　三　宅　　博

Bewick's Swans of Lake Biwako:Hiroshi Miyake

日本最大の面積を誇る湖に、白鳥の飛来がないはずがないと、私は、予々思っておりました。会報により、少数のコハクチョウが飛来していることを知ってはおりましたが、私自身、確めることもなかったのです。

ところが、今年２月、琵琶湖西岸、滋賀県高島郡新旭町大字饗庭に、白鳥の飛来ありと新聞に報道されました。早速、出向き、そこで、餌づけを試みられている堀野善博氏にお会いしてお話を伺ってまいりました。しかし、56年12月より、観察し始められたところであり、今後のご健闘に期待いたしたく節に願っております。

ここには、数年来、白鳥が飛来しているとのこと。今年、私が参りました時には、コハクチョウの成鳥が10羽、民家がたちならぶ岸から、50m程沖あいにおりました。

この秋に飛来したならば、すぐご一報下さるように堀野氏にお願いして参りましたので皆様にもご報告が出来ますことと思います。

（京都市左京区岩倉中在地町長谷町６２２－１０２）

1981年の年末の中海にて　三宅　博，三宅豊恵

From Lake Nakaumi at the Eed of 1981:Hiroshi Miyake and Toyoe Miyake

12月25日から、中海に私達家族は逗留していた。白鳥の写真を撮ることが目的の私達には、その被写体の数が少ないのを、前もっての電話で、門脇氏より伺っていた。それでも、の思いでやってきた。案の定、白鳥海岸には、岸から離れたところで、六羽だけだった。27日も駄目だった。しかし、28日は違っていた。いや、そうなる筈だった。朝日がとてもきれないな日で、朝靄がかかっていた。白鳥海岸は、皆様よくご存知じのように白鳥のねぐらは別にあるので、朝、夜明けとともに、門脇氏の播く餌を求めて、群をなして次々に飛んで来るのが、今までに見られた美しい光景であった。全盛期のころは、シャッターを押すのに急がしく、フィルムの入れ替えが間に合わぬ程で、今にして思えば嬉しい悲鳴をあげていたものだった。だが、だんだんと、飛来は少なくなり、去年の12月から様子は増々悪くなり、海岸によりつかなくなっていた。今年も一旦11月に飛来したものの、

12月にはその数は僅かで、しかも岸に接岸することはなくなっていた。門脇氏は、ストーブで朝ごはんの用意。私は自動車のふきそうじをしていた。遠のりをした人ならおわかりと思うが、露で濡れ、そこへ泥がついて、どろんどろんになるので、それなりに美しくするためだ。私は、その時、

白鳥海岸に接岸しようとするコハクチョウの群
（1981年12月27日．三宅　博 撮影）

見た。もう、車のところから走り出していた。「きた！」それぞれの心の中が、ざわめいた。私は、１８０mmをつけて、用意がしてあった。門脇氏も、朝ごはんの用意を途中でほうりだし、もう、餌の準備にかかっておられた。さっさと、一輪車を持ってきて、餌を積んで定位置へ「どうして、よらんだかねえ」と、ひとりごとを言いながら、播いてもどりしな「今日は、餌につくぞ」それは、子供達にむかって言っておられたのだが、自分に、言いきかせておられるかのようだった。私の胸には柿沢氏が、「餌づいたものが、一度離れたらもう寄りつかない」と、いわれたのが気がかりに思いをよぎった。そんなことを否定したい気持でいっぱいだった。そんなことを否定したい気持ちでいっぱいだった。だが、意に反してやはりそのまま接岸せず、一ツ石の方へ白鳥は流れていった。しばらくの静寂である。

しかし、一ツ石にいっていた一群とは別に飛んできた、飛んできた。門脇氏が、散髪に行っての帰りの頃でした。「見ました、見ました」と答えて、留守中の経過を説明する私に白鳥さえ来れば、言葉はいらぬ、それ以上の嬉しさが、顔に満ちていた。白鳥海岸に、姿を見せなくなって久しい大群であった。でも、それは沖の方で、接岸するかどうかは疑問でした。一ツ石の方へ寄ったり、彦名の方へ向いて、飛び立つ様子をしたり、二転、三転して、はいってきた、はいってきた。海岸と呼べる領域で、餌を啄み始めたり、羽づくろいを始めたり、憩いの時をすごし始めた。ここまでくれば大丈夫だと、私達の胸は、安緒の思いで満たされていた。一群なりとも、再度餌づけば後発隊もいずれ、姿を見せてくれると希望をいだかせたのだった。近辺の人々も幾人か見にこられた。「今日は、きちょってやなあ」」でも、何より門脇氏の顔が、一番紅潮して、めったに見られない

顔をしておられた。今ーズン白鳥が来訪して、離岸して以来、初めての接岸であったのだ。私達に、「貴方々は、今回は恵まれておられますなあ」とさも満足気そのものであった。私達も久しぶりに、中海の白鳥を見た思いにひたっていた。それほど、私達の眼前から、中海の白鳥は姿を消していた。というのも、それほど白鳥にとって、中海の環境は悪化し、白鳥海岸のメリットはなくなっていたらしい。全て、人間のなせることである。しかし、三時前状況が変った。白鳥が並び始めた。おかしい。第一陣が飛び立った。そして次々に飛びたった。今までに見たこともない船が出てきたのだ。第一陣は、港を出た時に飛びたったのだ。白鳥は、よく知っていた、「ありゃ　操業違反だ」カモたちまでが、一斉にみんな飛び去った。「折角　帰ってきちょったになあ」私も、白鳥がいなくなると、急に忘れていた寒さが身にしみた。「もう　今日は駄目だ」」みんなが思ったことだが、それを門脇氏は、口にした。どんなに空しい思いであったか、計り知れぬものがあった。操業違反の船であっても、地元の人だけに行政力は期待薄であるように思われた。

私達のこのさびしい思いを、白鳥に知らしむるには、どのようにすればよいのだろうか。この胸を開いて白鳥に見せるわけにもいかず、まずは人間を啓発していくよりほかはないのである。これまた難問である。

（京都市左京区岩倉長谷町622−102）

中海の白鳥を憶う　岩　田　正　俊

Perspectives of the Swans of Lake Nakaumi: Masatoshi Iwata

昭和43年１月８日、荒島のモーテル東沖に西強風の波のまにまに、白鳥の群が浮んでいた。数えて見ると108羽、これが私の見た中海での初めての白鳥群であった。

その後数十羽の群れが、モーテル西方の昔捨て石された浅瀬に浮びつつ、また長い首を水中に突込んでいるのを度度見た。この場所は山陰線の鉄路に、またそれに平行した９号線の国道に沿った湖岸であって、そこを通る列車や自動車の騒音のはげしいところであるが、白鳥共は何の恐れることもなく、平然と湖底の餌をあさっていた。

その頃意東海岸の、後に命名された俗称白鳥海岸にも数十羽集っているとの情報を得、両地を往復している白鳥も見られた。

43年初春（２月下旬〜３月上旬）には、白鳥の群れは北へ去ったが、これが一応白鳥群の中海への初飛来と考えられた。それ以前に中海の西側の意宇川下流や大橋川下流にも、数羽乃至数十羽の群れが浮んでいたとの情報はあった。

43年秋には白鳥海岸と陸続きの、中海干拓揖屋工区に堰堤ができ、それに取囲まれた大きな水溜りの池ができたので、白鳥の群れを始め鴨の類が数万羽集って、主として昼間の水鳥の休息地となった。と同時に篤志家の門脇益市さんが、白鳥海岸で念願の餌付けに成功し、揖屋工区の水溜りは白鳥の安静なネグラとなった。